



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	捕殺個体を利用したエゾヒグマ (<i>Ursus arctos yeasoensis</i>) の繁殖および栄養状態評価に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	森脇, 潤
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(獣医学)
Dissertation Number	甲第13071号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70464
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jun_MORIWAKI_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

野生動物学 博士（獣医学）

氏名：森脇 潤

学位論文題名

捕殺個体を利用したエゾヒグマ(*Ursus arctos yesoensis*) の 繁殖および栄養状態評価に関する研究

エゾヒグマ (*Ursus arctos yesoensis*) は北海道に生息する最大の陸生哺乳類である。北海道の適正な保護管理に向けて、エゾヒグマの生態、行動、生理、疾患、人とヒグマの関係等に関連する科学的情報の蓄積が必要である。特に、冬眠前の栄養状態が雌ヒグマの繁殖の成功や失敗を決める要因とされており、エゾヒグマの栄養状態や繁殖を正確に推定する有用な手法が求められている。

本研究では、捕殺個体を利用してエゾヒグマの繁殖および栄養状態を評価することを目的とし、第一章では卵巣と子宮からなる雌性生殖器の肉眼観察から推測される繁殖パラメータの年次変化を詳細に調べた。2010-2013 年の間で、着床数は排卵数に比べて少なく、年次変化を示していた。また、エゾヒグマには着床前後の胚あるいは胎子死あるいは当歳子の出生後の死亡が起こっていることが強く示唆された。

第二章では、性差や成長を考慮しつつ、エゾヒグマの胸囲と体重から栄養状態を評価する方法を確立し、性別、月別、年次別および連れ子状況別に栄養状態を比較した。1991-2012 年の間で、エゾヒグマの栄養状態指標値は夏に低下し、過食期にあたる秋に高まる季節変化を示していることと、栄養状態指標値の年次変化が雌には認められた。しかしながら、単独雌と連れ子を有する雌（当歳子、1 歳子、あるいは連れ子年齢が不明）の間での栄養状態指標値に有意な差は認められなかった。

捕殺個体を利用した繁殖や栄養状態の評価から、繁殖パラメータや栄養状態の変化に関して基礎的な知見を得ることができた。今後、エゾヒグマの更なる適正な保護管理を行うための生物学的な情報を得るため、繁殖や栄養状態についての年次変化や、その変動要因に関するさらなる詳細が必要である。本研究の成果は、エゾヒグマの研究ならびに保護管理に新たな展開をもたらすものと考えられる。